

「消化器癌の術前・術中・術後照射 手術と放射線の最適併用」

国立病院九州がんセンター副院長 秦 一雄
東京女子医科大学助教授・放射線科 大川 智彦
杏林大学教授・外科 鍋谷 欣市
東京女子医科大学教授・消化器外科 羽生富士夫

編集

新潟大学教授・放射線医学

酒井 邦夫

わが国では、偏らない立場で記述された臨床腫瘍学に関する良書は少ない。恐らくそのために、癌治療の第一線では少なからず混乱がみられているのが現状である。その点で本書は、臨床の第一線で活躍している外科および放射線科の専門家が、それぞれに相手の立場を尊重しつつ、謙虚な態度で客観的な記述を心がけているので、全体としてバランスの取れた良書となっている。

総論では、放射線治療の基礎知識として、放射線の物理学的・生物学的性質、ならびに治療計画法が要領よくまとめられている。各論では、食道癌、胃癌、膵臓癌、胆道癌、肝臓癌ならびに直腸癌について、それぞれに最新のデータが呈示され、手術と放射線の効果的な併用のあり方がわかりやすく解説されている。消化器癌の臨床に携わっている外科医、放射線科医にとっては待望の手

引書であるといえよう。

消化器癌の治療においても、最近では治療後の患者の Quality of Life (QOL) が尊重されるようになってきた。例えば、直腸癌の手術は術後の排便・排尿機能の温存、性機能障害の防止を目的として縮小化の方向にある。局所再発を防止し、なおかつこのような機能温存の縮小手術を可能にするために、放射線治療または放射線化学療法の併用が効果を發揮している。また、食道癌の治療でも単なる延命のみを目的とした胃瘻増設などの手段は行われなくなり、経口摂取機能の温存可能な放射線治療に大きな期待が寄せられている。本書は一貫してこのような癌治療後の患者の QOL の改善を目的として、手術と放射線の最適併用のあり方を模索しており、ここに本書の最大の特徴があるといえよう。

しかし、数多くの著者による共同

執筆であるための弊害もないわけではない。術中照射の記述などに若干の重複がみられる一方で、腫瘍の病態や進展様式などの腫瘍学に関する記述がやや不十分に思われる。また、胆道癌の小線源治療の項では⁶⁰Co による RALS 治療のみが取り上げられており、¹⁹²Ir による治療法についてはほとんど触れられていないのは片手落ちである。しかしこのような点は版を重ねるうちに改善されるであろう。

本書は外科および放射線科の研修医にとっては格好の手引書として、それぞれの専門医にとっては up-to-date な知識を整理する参考書として役立つであろう。また、消化器癌の化学療法に関与されている内科医の方々にもぜひ参考にしていただきたい良書としてお勧めする。

● B5 258 頁 図 127 写真 75
1992 定価 8,755 円(税込) 〒300 円

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)